青山経営論集
第35巻 第3号
2000年12月

特別寄稿

経営学部創設35周年に寄せて

―経営学部教授会と開かれた社会―

堀越比呂志

1

学部創設35周年おめでとうございます。私は，昨年の4月に母校に帰るまで，13年間を青山で過ごさせていただき，曲がりなりにも青学の校風というものを感じとり，多大な影響を受けたと思っております。以前にも書いた事があるのですが，私自身が考える青山学院像の核心は，「自分が損をしても他人の事を考えられる人間性」だと思っております。これは，青学の歴史，たとえば創立期に関わったアメリカのメソジスト教会の人々が，第二次大戦で日本兵に肉親を殺されたという個人的背景を飛び越えて，戦前から戦後にかけて日本の青山学院のための献金を続けていたというような，国や民族を越えた人間性をつらぬいた数多くのエピソードを知ることによって，そして，多くの青学出身者の人柄に接った中から，私が確信したことです。この像は，自分の事ばかりを考え「バレなきゃいいや」という考えが蔓延しているこの国の現状を見ると，まさにその対極にあり，この嫌な風潮を変える源動力であり，希望の光だといえます。私自身も，「やられたらやり返す」という闘争的な面が生まれつき強いため，この青学の校風に気づいてからは，自分の中の野蛮さ，不遜さを再認識し，血の気の多さも少しはおさまったように思います。また自分の事ばかりを考えることから生じる卑怯な心と戦うエネルギーを与えてくれたようにも思います。そして，これらのことは，私に教育者としての自覚を与え，その進歩を促してくれたと思っております。

以上のことを気づかせてくれたのが，まさに経営学部での13年間の生活でした。そうはいっても，経営学部が以上述べたような理想的な状態に常にあったと美化している訳ではありません。しかし，色々な人々の色々な考えや想いがぶつかりあっても，異なる意見に耳を傾け，自分が少々損をしても基本的には利他的に問題を解決しようとする姿勢がそこには必ず生じていたのであり，その意味で青学の精神的伝統が常に出現していたように思います。

こういったことを特に強く気づかせてくれた具体的な場が，経営学部の教授会でした。私は，就任当初は，会議嫌いと馴じみのなさから，「誰かがうまくやってくれるだろう」という感じでしか参加していませんでした。しかし，様々な委員を経験し，特に学部のカリキュラム改革が動き出した頃になって，様々な分野の人々がそれを自分の問題として真剣に討議する姿を見ながら，教授会の意義を再確認しました。当時の教授会は，若手の教員が積極的に討議に参加し，年齢や分野を越えて権威ばったところがなく，とても開かれた雰囲気がありました。私は，この開かれた雰囲気こそが，教育機関としての経営学部の宝であり，先に述べた青学の精神的伝統からいっても永久に失なってほしくないものだと考えます。この事は，官僚化し，専門分化することにより討議が形骸化した会議や学会をいくつか経験すると，実に強く感じることです。そこで，次に，この開かれた雰囲気，開かれた社会について若干考察してみた

いと思います。

2

開かれた雰囲気は，開かれた心を持った人がいればすぐに実現するわけではありません。それは大幅に，そこに存在する制度的状況に依存するといえるでしょう。たとえば，専制君主制のもとで，そのような開かれた雰囲気を実現しようとしても不可能なわけです。そして，その専制君主制から抜け出し，自由を勝ちとるためには，多大の努力と犠牲が必要となります。それ故，自由を実現する制度がない，閉じられた社会が現在でも多く存在するのを見る時，いかに自由主義のもとでの制度が貴重なものなのかがわかります。哲学者カール・ポパーは，その著書「開かれた社会とその敵」の中で，開かれた社会を実現する上で，民主主義はこれまでのところ最良の政治形態であると述べ，それは，自らのリーダーを専制君主にすることのないように合理的な討議を通して非暴力的に交替させることができる点にあると述べられています。それゆえ，ここでは，暴力から討議への重点の移行のために，野放しの暴力の制限と，民衆の参加が前提となっています。さらに，ポパーは，民主主義のもとで登場した資本主義について，そこから新たに発生しうる経済的暴力の可能性，すなわち，「経済上の強者は依然として自由に経済上の弱者を脅しつけ，その自由を強奪する」[1]可能性を指摘し，「無拘束の資本主義が経済的干渉主義に道を譲ることを要求せねばならない」[2]と述べます。このようにポパーにおいて，開かれた社会とは個人の自由を守るためにあるのですが，無制限の自由を認めるものではありません。「自由は，制限されないならば，すでに見たように，自由そのものを廃棄する」[3]という自由のパラドックスが存在するのであり，自由そのものを廃棄しないためにも，様々な制度的制限が課せられるべきであり，民主主義を根幹としながら，ピースミール的に制度的解決を推進していくことが推奨されているのです。

3

以上のような，個人の自由→開かれた社会→民主主義→ピースミール的制度設計というポパーの主張は，ファシズム及びマルキシズムの双方に共通した全体主義に対する批判の中でなされました。そして，ポパーは，この全体主義にかわる政治的提言を，彼のもう1つのフィールドである科学哲学における主張ときわめて対応した形で展開しています[4]。すなわち，その接点は，批判的な討議の尊重であり，それによる実り豊かさの強調です。どちらにおいても，人間が誤りをおかすことを認めた上で，批判的討議によってその誤りを発見して，少しでもそれを排除していこうとする果てしないプロセスが強調されているのです。ここでの議論は，自分が誤っていないことを示す正当化のための議論ではありません。自分の意見を変えないことに重きが置か

れるのではなく，それを修正し新たな創造を強調するのです。科学哲学の分野で，こうしたポパーの主張と対立する科学観が，クーンのパラダイム論であり，クーンは，そこで科学者集団の中でのみ有効な，結果のわかった，その意味ではおもしろみのないパズル解きが，実際の科学者の活動であると主張しました[5]。そして，このクーンの主張は，まさに政治のフィールドにおける全体主義，そして民主主義のもとでの官僚主義といった像と重なりあってくるといえます。それゆえ，ポパーとクーンの論争において指摘された，科学哲学と科学史の対比という点は，政治における開かれた社会と閉じた社会の間の論争においても同様に指摘可能であり，開かれた社会の実現可能性の問題，あるいはその現実との対比といった問題が登場してくるものと思われます[6]。実際，「開かれた社会の哲学とその敵」で，ポパーは，全体主義の批判と民主主義の重要性を述べてはいますが，その民主主義を根幹とした上でのより詳しい制度的提案については，明確に述べているとはいえません。そこで，次に，「民主主義を基盤とした誤り排除は本当に可能なのか」，「それを実現するためには，どのような制度的対策が必要なのか」という問題を考えてみたいと思います。

4

前述のように，ポパーの想定した開かれた社会では，問題を共有し，その解決において様々な考えを持った人々が参加し，討議によって誤りを排除するという事が想定されています。しかし，ここで，多様な民衆が問題を共有できるのか，様々な種類の問題が登場してくる場合にその専門家以外は参加できないのが現状ではないのか，それゆえ現実はクーン的なパラダイム，閉じた社会の林立といったものではないのか，といった疑問が登場します。それ故，様々な民衆が参加できるためには，民主主義という政治的制度とともに，さらにいくつかの制度的改善が必要になると考えられます。まず第1に，教育制度において，様々な分野に関する知識を共通の基盤として所有させること，そして様々な分野を関連づける論理的思考と議論の作法の修得が不可欠となるでしょう。第2に，マスメディアを中心としたジャーナリズムにおいて，特定の分野で生じている問題をわかりやすく伝え，各分野間の対話を生み出すような義務が生じるでしょうし，その方向でバイアスを加えるような言論の自由には制限を加えるべきかもしれません。第3に，政治制度において，市民発議をすくい上げる制度を整備する必要があるでしょうし，問題を共有させるための政治家の民衆との対話を盛り上げる制度も必要かもしれません。第4に，暫定的な解決案を実施した後で，その後のなりゆきをチェックし知らせる公共の第三者的機関が必要でしょう。ポパーの想定した開かれた社会を実現するためには，民主主義を根幹とした上で，少なくとも，以上の4つの分野でより具体的な制度が追究されねばならないのであり，それは，誤りを隠すことのない，誤りから学びそれを修正する方向での行動に重きがおか

れるように設計される必要があります。

5

以上のような制度的改善を追究していくことは可能であり，個人の自由を守り，開かれた社会を維持していくためには，その追究は果てしなく続いていくことでしょう。しかしポパーもいうように，制度だけでは，どこまでいっても完全ではありません。すなわち，「制度は要塞のようなものである。それはうまく設計されるとともにうまく人員配置されねばならない」[7]のです。充分に考察された制度であっても，個人の利己的な打算によって悪用される可能性は常にあります。たとえば，皆のことを考え，民主主義にのっとっているような顔をして，その実自分の出世や派閥づくりを優先して，バイアスのかかったデータや情報を示したり，プロセスを無視して多数決を行うなどという事はよくあることです。そして，これを野放しにしておくと，まわりの無関心をいいことに，知らぬまに制度が変えられ，気がついた時には自由までもが破壊されてしまう危険があります。こうした危険をチェックするには，少なからず利他的な心が必要でしょう。利己的な場合，自分に関係のないことには目をつぶったり，たとえ自分の利害からそれを批判しても，巧みな不正を公共の認める形で駆逐することが困難な場合が多いからです。こう考えると，個人の自由を追究する個人主義は利己主義であってはならないのであり，これは前述の自由のパラドックスからも帰結することです。そして，ここに，個人主義であって利他的な人間像の必要性が示唆されるのであり[8]，私には，それが前述の青学の校風と重なってくるように思えるのです。それゆえ，青山学院の精神的伝統を受けつぎながら，経営学部の教授会がいつまでも開かれた雰囲気を持続させていってくれることを心から祈っております。

注

1) Popper, K.R., *The Open Society And Its Enemies*, Princeton University Press, first pubricatioin in U.S.A. 1950, 邦訳，小河原誠・内田詔夫『開かれた社会とその敵』未来社，第二部，117頁。
2) 同邦訳，第二部，118頁。
3) 同邦訳，第二部，117頁。
4) この点に関しては以下を参照。Magee, B., "What Use Is Popper To a Practical Politician?", in Jarvie, I., and Sandra Pralong (eds.), *Popper's Open Society After Fifty Years — the Continuing Relevance of Karl Popper*, Routledge , 1999, pp. 146-158.

5) Kuhn, T., *The Structure of Scientific Revolution*, The University of Chicago Press, 1962, 邦訳, 中山茂,『科学革命の構造』みすず書房, 1971。
6) Magee, op. cit., および同じ本の中の以下の論文も参照。Notturno, M.A., "The Open Society and Its Enemies: Authority, Community, and Bureaucracy" pp. 41—55.
7) Popper, 前掲邦訳, 第一部, 131頁。
8) 同邦訳, 第一部, 108～114頁を参照のこと。